

新しい大学入試を突破する力を育てる 学力向上策の研究

—新学習指導要領が求める学力の育成—

福井県教育総合研究所 教科研究センター 高校教科研究課

澤田則義 中森雅巳 滝波正代 谷山潤也 澤大輔

高校教科研究課の今年度の主な取り組みとしては、高校生学習状況調査の実施・分析・結果報告、福井県到達度確認テストの実施・分析・結果報告、大学入試通信の発信、教科別研修講座の企画・実施等が挙げられる。

本稿では、令和4年度から実施される新学習指導要領で求められる学力を踏まえて、新しい大学入試を突破する力を育てる学力向上策について考察する。

〈キーワード〉 高校生学習状況調査、福井県到達度確認テスト、新学習指導要領、大学入学者選抜改革

I はじめに

本年度（令和元年度）から3年間の移行期間を経て、また令和2年度の教科書検定、令和3年度の教科書の採択・供給を経て、令和4年度から新学習指導要領が学年進行で実施される。新しい時代に必要となる資質・能力を育成するための新学習指導要領への移行が、いよいよ目前に迫っている。

高校教科研究課は、今年度も教育庁高校教育課と連携して高校教育に関する調査研究活動を行ってきた。主な取り組みとしては、次の三つが挙げられる。

まず、県立の全日制・定時制の全高校生を対象に高校生学習状況調査を実施・分析・結果報告した。高校生学習状況調査は、平成24年度に「学習と進路に関するアンケート調査」という名称で始まり、今年度で8年目になる調査である。全国学力・学習状況調査や福井県学力調査（以下、SASA）の質問項目ともリンクを持たせるなど、高校生の現状を的確に把握した。その分析結果をもとに、教員の指導力向上や授業改善を図るとともに、高校生の学力向上を推進する様々な事業に取り組んだ。

次に、県立普通科系高校の1年生を対象に福井県到達度確認テスト（以下、県到達度テスト）を実施・分析・結果報告した。今年度は、1年生で1回実施した（1月）。昨年度から、国語と数学には、従来のマーク式問題に加え、記述式問題を取り入れた。県到達度テスト実施後、生徒には、解答解説と校内・県順位を示した個票をもとに自分の弱点を把握し、苦手分野に取り組む意欲を高め、自主的に弱点補強の学習をするよう、また学校には、県全体の分析及び自校の分析を通して、指導の在り方を検討し、具体的な指導の改善をするように促している。そのために、できる限りすみやかに県全体の誤答分析を行い、指導のポイントを明確化し、各学校に対して具体的な指導方法等の提案を行った。

また、高大接続改革が進められる中、いよいよ令和3年1月に実施される大学入学共通テストの進捗状況と、令和4年4月から学年進行で実施される新学習指導要領に向けた授業改善について、大学入試通信を発信した。高大接続改革は、高校生のみならず、小学生・中学生に大きな影響を与えることを鑑み、福井県の全小学校・中学校にも配信した。今年度の大学入試通信は、各号ごとにテーマを絞り、全3号を発信した。

今年度の調査研究活動を「新しい大学入試を突破する力を育てる学力向上策の研究 —新学習指導要領が求める学力の育成—」の観点から省察する。

II 高校生学習状況調査からみえる本県の高校生の現状

1 高校生学習状況調査について

本年度は、「国や地方の政治への関心度」と「平日の睡眠時間」についての質問項目を追加し、県立の全日制・定時制の全高校生約 15,000 人を対象として調査した。

2 調査結果（丸数字は質問項目の番号を表す）

(1) 進路意識・キャリア教育について

① 将来の夢や目標

持っていると感じた生徒の割合は 73.5%で、昨年度より 1.0 ポイント減少した。

② 卒業後の進路希望

決まっていると答えた生徒の割合は 59.7%で、昨年度より 1.4 ポイント減少した。進路志望が決まっている割合は、学年が上がるにつれて高くなっている。

③ 進路を考える上で参考になった進路関係の行事（複数回答可）

大学訪問や職場見学 41.1%、インターンシップ 18.2%、職業人による講演会 17.4%と続き、職業について学ぶ機会が上位になっている。

(2) 家庭学習・生活について

④ 平日の帰宅時間

午後 7 時と 8 時に帰宅する生徒が最も多く、合計 54.0%であり、昨年度とほぼ同じである。部活動を終えた生徒の多くが帰宅する時間であると考えられる。

⑤ 平日の学習時間

平均 1.54 時間は昨年度と同じである。3 時間以上の生徒が 13.1%いる一方で、1 時間未満の生徒が 47.1%いる状況である。

⑥ 休日の学習時間

平均 2.19 時間は昨年度とほぼ同じである。3 時間以上の生徒は 30.0%と、平日と比べて 16.9 ポイント多いが、1 時間未満の生徒は 39.4%と、平日と比べてわずか 7.7 ポイント少ないだけであった。

⑦ 学習塾の利用状況

通塾率は 23.5%で昨年度とほぼ同じである。全体の約 4 分の 1 の生徒が塾に通うか、家庭教師の指導を受けている。

⑧ 平日のテレビ、ビデオ、DVD 視聴時間

平均 1.52 時間で昨年度とほぼ同じである。1 時間未満の生徒は 48.9%で、昨年度より 2.5 ポイント増加、3 時間以上の生徒は 9%で、昨年度より 1.1 ポイント減少している。近年のテレビ離れの傾向が現れている。

⑨ 平日のゲームに要する時間

平均 1.68 時間で昨年度とほぼ同じである。1 時間未満の生徒は 43.3%で、昨年度より 0.6 ポイント減少、3 時間以上の生徒は 17.5%で、昨年度より 0.6 ポイント増加している。スマートフォン等によるゲームの流行が影響しているものと考えられる。

⑩ 平日のインターネット（SNS 利用含む）使用時間

平均 1.61 時間で昨年度とほぼ同じである。1 時間未満の生徒は 51.3%で、昨年度より 4.2 ポイント増加、3 時間以上の生徒は 12.8%で、昨年度より 0.5 ポイント増加している。

⑪ 学習のインターネット利用（複数回答可）

利用している割合は 84.3%で、昨年より 2.8 ポイント増加している。内容は、調べ学習が 76.8%、学習アプリや映像授業が 26.8%、分からないところを SNS で質問する割合が 15.0%である。

⑫ 1か月の平均読書冊数

1.60冊で、昨年度とほぼ同じである。1冊も読まない生徒が43.8%、1～2冊読む生徒が42.8%であり、読書量が少ない状況が続くとともに、その状況は学年進行で強まる傾向にある。

⑬ 新聞の閲覧状況

読んでいる生徒は13.8%で、昨年度より1.8ポイント減少している一方で、ほとんど、または全く読まない生徒は70.0%で、3.7ポイント増加している。活字離れの傾向が進んでいる。

⑭ テレビやインターネットによるニュースの視聴状況

視聴している割合は86.3%で昨年度とほぼ同じである。今年度より、テレビによる視聴とインターネットによる視聴の差を調査したが、大きな差異は見られなかった。

⑮ 地域・社会での問題や出来事への関心度

関心がある生徒は69.5%で、昨年度より4.0ポイント減少している。福井国体直前の調査だった昨年度の数値よりは下がっているが、一昨年よりは2.1ポイント増加している。総合的な学習の時間等での地域との協働学習による、上昇傾向がみられる。

⑯ 国や地方の政治への関心度

関心がある生徒は38.4%で、全日制高校では学年が上がるにつれて割合が高くなる傾向である。

⑰ 平日の睡眠時間

平日の睡眠時間は平均6時間26分である。5時間未満の生徒は5.5%であった。

(3) 授業や学習について

⑱ 授業の分かりやすさ

分かりやすいと答えた生徒は78.8%で、昨年度より1.7ポイント増加している。

⑲ 授業のおもしろさ

おもしろいと答えた生徒は68.3%で、昨年度より1.8ポイント増加している。

⑳ 先生の説明や指示の分かりやすさ

分かりやすいと答えた生徒は83.8%で、昨年度より0.9ポイント増加している。全教科において80%以上と高い割合である。

㉑ 授業の難易度

ちょうどよいと答えた生徒は56.0%で、昨年度より0.9ポイント増加、やや難しいと答えた生徒は29.9%で、昨年度より0.7ポイント減少している。

㉒ 授業で内容について十分に考える活動の有無

あると答えた生徒は79.7%で、昨年度より1.5ポイント増加している。

㉓ よく話し合う活動の有無

あると答えた生徒は65.2%で、昨年度より3.6ポイント増加している。特に、これまで大きな伸びが見られなかった理科で6.9ポイント増加した。全ての教科において、あると答えた割合は2年連続で増加している。

㉔ 自分の考えを説明したり文章に書いたりする活動の有無

あると答えた生徒は60.6%で、昨年度より3.7ポイント増加している。特に理科では6.5ポイント増加している。全ての教科において、あると答えた割合は2年連続で増加している。

㉕ 自宅学習の方法

予習13.2%、復習26.6%、予習と復習11.2%、試験前の学習のみ35.9%、塾や通信教育等の学習2.7%であり、昨年度とほぼ同じである。また、自宅学習をしない生徒は10.4%で、昨年度より1.2ポイント減少しているが、さらなる改善が必要である。

②⑥ 試験後の復習の方法

間違いを含めた全ての問題の復習が 10.3%、間違えたところが解けるようになるまでの復習が 30.4%、間違えたところの確認が 47.8%である。前者二つの回答割合が、昨年度より 3.0 ポイント増加している。また、全く復習しない生徒は 11.5%である。

②⑦ 補助教材（教科書以外のもの）の活用状況

十分に活用、試験前にのみ活用するという回答割合は 69.0%で、昨年度より 2.6 ポイント増加している。

②⑧ 授業の分からないところの解決方法（複数回答可）

友達に教えてもらう 70.3%、もう一度自分で考える 28.6%、本やインターネットで調べる 25.4%、授業後に先生に質問する 24.6%、授業中に先生に質問する 16.8%等である。そのままにしておく割合は 4.4%と、昨年度より 1.2 ポイント減少している。昨年度より本やインターネットで調べる割合が 3.1 ポイント増加したことに対して、先生への質問は 1.7 ポイント減少、友達への質問は 3.1 ポイント減少した。

「授業の分かりやすさ」とのクロス集計では、各教科とも「授業後に先生に質問する」ことによる度の高い傾向が見られる。

3 SASA2019（第68次福井県学力調査）との比較

(1) ⑤と「平日に、一日平均どれくらいの時間、宿題をしていますか。」

高校生 1.54 時間 中学2年生 1.40 時間 小学5年生 1.38 時間

* 平日の学習時間が1時間未満の割合

高校生 47.1% 中学2年生 25.2% 小学5年生 44.4%

(2) ⑨・⑩と「平日に、インターネットやゲームなどを一日どれくらいの時間、利用していますか。」

高校生 3.29 時間 中学2年生 1.89 時間 小学5年生 1.53 時間

* 平日のインターネットやゲームに要する時間が3時間以上の割合

高校生 30.3% 中学2年生 16.0% 小学5年生 11.1%

(3) ⑫と「あなたは、最近1か月間に何冊くらい本を読みましたか。（マンガ、雑誌は除く）」

高校生 1.60 冊 中学2年生 2.56 冊 小学5年生 5.88 冊

* 1か月に1冊も読まない割合

高校生 43.8% 中学2年生 26.4% 小学5年生 9.3%

4 まとめ

進路意識・キャリア教育に関する質問については、昨年度とほぼ同様の結果であった。

家庭学習・生活に関する質問については、スマートフォン等の利用には変化が見られないが、学習で利用する割合が増加した。また、読書冊数は昨年度並みではあるが、1冊も読まない生徒の割合が 43.8%、1～2冊しか読まない生徒の割合が 42.8%、新聞をほとんど、または全く読まない生徒の割合が 70.0%であり、活字離れの傾向が顕著である。

授業や学習に関する質問については、思考力や表現力の育成に継続的な改善傾向が見られ、分かりやすさや興味関心の高い回答割合となった。各学校において、授業改善の取り組みが進んでおり、考え、話し合い、表現する時間の確保の高まりは、新教育課程で文科省が掲げる「主体的・対話的で深い学び」につながっている。

SASA2019との比較により、平日の学習時間が1時間未満の高校生は、中学2年生よりかなり多く、小学5年生並であること、1か月の読書量は、中学2年生、小学5年生よりかなり少ない。一方で、平日のインターネットやゲームの利用時間が 3.29 時間、3時間以上の割合も 30.3%と、中学2年生、小学5年生よりもインターネットやゲームに要する時間が長い傾向が顕著に見られた。

Ⅲ 福井県到達度確認テストからみえる本県高校2年生の学力の現状

1 福井県到達度確認テストの概要

本県では、平成28年度から県立普通科系高校の生徒（各学年約3,100人）を対象として県到達度テストを実施している。目的は、生徒の学習到達度を測定し、定着が不十分な箇所を明確にし、効率的に学力向上をすすめるために有用な情報を提供することにある。対象学年や実施内容を以下にまとめた。

名称	受験対象	実施時期	解答方式	教科・科目
1年	普通科系高校1年生	H28年度 1月	マーク式 国語、数学の一部は記述式	国語、数学Ⅰ、英語
		H29年度 1月	マーク式 国語、数学の一部は記述式	
		H30年度 1月	マーク式	
		R元年度 1月	マーク式	
2年①	普通科系高校2年生	H28年度 7月	マーク式	国語、数学Ⅰ・数学ⅠA、英語
		H29年度 9月	マーク式	
		H30年度 9月	マーク式	
		R元年度 なし	—	
2年②	普通科系高校2年生	H28年度 1月	マーク式	国語、数学Ⅰ・数学ⅠA、数学Ⅱ、英語、世界史B、日本史B、地理B、物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎（H30より実施）、物理、化学、生物
		H29年度 1月	マーク式	
		H30年度 1月	マーク式	
		R元年度 なし	—	
3年	普通科系高校3年生において、難関～中堅国公立大学志望者のうちの希望者	H28年度 8月	記述式	文系：国語、数学（文系）、英語 理系：数学（理系）、英語、物理、化学
		H29年度 8月	記述式	
		H30年度 なし	—	
		R元年度 なし	—	

令和元年度は、1年生対象のテストのみ、1月に実施した。方式はマーク式で、国語、数学の一部に記述式を取り入れて行った。国語の記述式問題は、生徒がおこなった自己採点のデータも集約した。

2 各教科にみられる課題（平成29年度・平成30年度・令和元年度の1年生の結果から）

結果分析から見られた課題の考察を教科ごとに挙げる。

(1) 国語

筆者の主張を把握することにおける課題

現代文では、叙述などに引きずられて誤った解釈してしまう傾向がある。具体的事例から一般化し、筆者の主張を把握するための要約力と、それを支える語彙の正確な理解が今後の課題となる。

基礎知識の定着とそれをふまえて内容をとらえることにおける課題

古典では、古文単語の知識不足により登場人物の心情や状況などを読み取れなかった問題が多い。また、漢文句法や語句の意味を理解しながら傍線部以前の記述と関連付けて読解する力が求められる。

(2) 数学

係数に文字を含む2次関数における課題

2次関数のグラフについて、未知数にもなって軸を動かして考えることができないことが指摘されている。条件を整理して、場合分けする論理的な思考力が必要である。

根号や絶対値を含む式における課題

根号や絶対値を含んだ式の場合、特に基本的な計算力が求められる。不等式の性質を確認しながら、改めて両辺を同じ数で割ったり、式を展開したりする際の注意もさせる必要がある。

記述部分の課題

正答率が低い要因として、数学用語の意味を正しく理解できていない、問題文を正確に読めていないことを挙げている。考え方は理解できるものの、軸・頂点・定義域など数学に関する用語の使い方の誤りや、説明の厳密さが不十分であるため得点につながらないものがみられた。そのため、問題文を正確に理解するた

めの読解力を身に付けさせる必要があることに加え、要素と集合などの数学用語について、意味の違いをしっかりと理解させ、その用語の使い方を授業でも細かく指導していく必要がある。

(3) 英語

正しい発音・アクセントの定着における課題

正しい発音・アクセントを意識した音読を多くおこない、カタカナ語における日本語と英語の発音・アクセントの違いを理解させる必要がある。

英文全体の要旨を正しく読み取る力における課題

逐語訳ではなく、前後の文脈との整合性や、言外に含まれる意味を理解する力を育成する必要がある。各文の役割やパラグラフの構成を指導したり、段落ごとの要旨を短くまとめた「段落メモ」や、各段落のキーワードを書かせて、英文全体の展開と要旨をつかませるといった指導が必要である。

3 国語記述式問題の自己採点における分析

平成30年度と令和元年度到達度確認テストでは、大学入試共通テストで導入されるとされていた記述問題が含まれている。国語は、この記述式問題について、教員による採点の結果と生徒による自己採点の結果を集計しており、その結果の分析を報告する。

両年度とも生徒自己採点と教員採点には大きな差があることがわかった。このような差が生じる原因として次のようなことが考えられる。

- ・ 解答をメモしておく意識が低く、自己採点時に参考にするものがない。
- ・ 主語がないことによる説明不足の解答や正答例のキーワードのみを書いた解答を正解としている。
- ・ 空欄前後の文章との整合性が取れていない解答を正解としている。
- ・ キーワードさえ用いてあれば正解と自己採点してしまい、争点となっていることは何かを正確に表現できているかについて自分で吟味できていないこと。

文章の中から必要となる情報を素早く的確に取り出したり、設問の条件を細かく読み取ったりすることができるように、速読をしたり、要約したり、状況把握を生徒同士で確認したり、争点になっていることを文章にまとめたりする活動が求められる。また、記述式問題では正答の条件を正確に読み取って自己採点しなくてはならないため、定期考査や各種模擬試験等での自己採点の練習が必要である。

IV 大学入学者選抜改革の概要

令和4年度から新しい高等学校学習指導要領が年次進行で実施となるのを前に、移行期間の初年度である今年度からは、総則、総合的な探究の時間、特別活動等、一部については先行実施されている。総則には、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」（思考過程を重視した学習、言語活動の充実、読書活動の充実、見通しを立てたり振り返ったりする活動の導入等）と、「学習評価の充実」（学習の過程や成果を評価して、指導の改善や学習意欲の向上を図ること）の2項目が謳われている。こうした高校教育改革と合わせ、大学入学者選抜改革の一つとして、令和3年度大学入学者選抜から大学入学共通テスト（以下、共通テスト）が実施される。高校教科研究課では、「大学入試通信」の作成・発行を通じて、大学入試改革に関する情報を県内小・中・高校の先生方に発信してきた。以下、その内容をもとに、大学入試改革の概要について述べていく。

1 大学入学者選抜改革の現状

現行の大学入試センター試験（以下、センター試験）に代わり、令和3年度大学入学者選抜から実施される共通テストでは、

- 英語4技能のうち、「書く・話す」力も含めて測ることのできる民間試験を活用すること
- マーク式問題の新たな出題形式導入に加え、国語と数学に記述式問題を導入すること

以上の2つが決められていた。

しかし令和元年11月1日、文部科学大臣より、令和3年度大学入学者選抜から導入予定であった民間試験活用のための「大学入試英語成績提供システム」について、「英語教育充実のために導入を予定してきた英語民間試験を、経済的な状況や居住している地域にかかわらず、等しく安心して受けられるようにするためには、更なる時間が必要」ということを理由に導入の見送りが発表された。

さらに令和元年12月17日にも、文部科学大臣より、共通テストにおける記述式問題の導入について、「再来年2021年1月実施の大学入学共通テストにおける記述式問題の導入については、受験生の不安を払拭し、安心して受験できる体制を早急に整えることは現時点において困難」として、見送りが発表された。

こうした文部科学省の一連の判断を踏まえ、大学入試センターは、令和2年1月29日に「令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法等（一部変更）」と「令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針（一部変更）」を公表した。今年度が最後の実施となったセンター試験、当初大学入試センターが発表したもの、そして今回の発表内容について、主な変更点を以下に整理した。

	センター試験	共通テスト (令和元年6月7日公表)	共通テスト (令和2年1月29日一部変更)
出題形式	〈マーク式〉	〈マーク式〉 ○ 連動型の問題（連続する複数の問いにおいて、前問の答とその後の問いの答を組み合わせで解答させ、正答となる組合せが複数ある形式）を出題する場合がある。 〈記述式〉 ○ 国語と数学において、それぞれ小問3問の記述式問題を導入	〈マーク式〉 ○ 連動型の問題（連続する複数の問いにおいて、前問の答とその後の問いの答を組み合わせで解答させ、正答となる組合せが複数ある形式）を出題する場合がある。 〈記述式〉 ○ ※出題せず
試験時間及び配点	○ 『国語』 80分(200点) ○ 『数学①』 60分(100点) ○ 『外国語』（英語） 【筆記】80分(200点) 【リスニング】60分(うち解答時間30分)(50点)	○ 『国語』 100分(200点)(マーク式問題200点及び記述式問題の段階表示) ○ 『数学①』 70分(100点(記述式問題を含む。)) ○ 『外国語』（英語） 【リーディング】80分(100点) 【リスニング】60分(うち解答時間30分)(100点)	○ 『国語』 80分(200点) ○ 『数学①』 70分(100点) ○ 『外国語』（英語） 【リーディング】80分(100点) 【リスニング】60分(うち解答時間30分)(100点)

「大学入試英語成績提供システム」の導入は延期されたが、大学入試センターが令和元年11月に発表した「大学入学者選抜に係る大学入学共通テストの出題教科・科目の出題方法等及び大学入学共通テスト問題作成方針について」によると、

- 発音、アクセント、語句整序等を単独で問う問題を出題しないことについては、英語教育の観点から大学入学共通テストの導入を機に改善を図るものであること
- 今回、英語のリーディングとリスニングの配点を均等にした趣旨は、高等学校学習指導要領が英語4技能のバランス良い育成を目指していることを踏まえたものであること

以上の2点については変更しないとしている。

また、共通テストの問題作成における基本的な考え方は、次の3点において、6月に公表されたものと変わらない。

- 大学入試センター試験における問題評価・改善の蓄積を生かしつつ、共通テストで問いたい力を明確にした問題作成

○ 高等学校教育の成果として身に付けた、大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力を問う問題作成

○ 「どのように学ぶか」を踏まえた問題の場面設定

高等学校における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のメッセージ性も考慮し、授業において生徒が学習する場面や、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決方法を構想する場面、資料やデータ等を基に考察する場面など、学習の過程を意識した問題の場面設定を重視

文部科学省は、共通テストに記述式問題を導入することにより、選択肢の中から解答を選ぶだけでなく、自らの力で考えをまとめたり、相手が理解できるよう根拠に基づいて論述したりする思考力、判断力、表現力を評価することや、高校に対して、「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善を促す大きなメッセージとすることをねらいとしていた。記者会見で大臣は、「初等中等教育を通じて論理的な思考力や表現力を育て伸ばすことは、大変重要であり、それら进行评估する観点から、大学入試において記述式問題が果たす役割が大きいことには変わりはありません。」と述べ、導入見送りはしたものの、「各大学の個別選抜において記述式問題の活用に積極的に取り組んでいただきたいと考えており、文部科学省として、各大学に対してそうした取り組みをお願いしていききたいと思います。」と述べている。

こうした「大学入試英語成績提供システム」及び共通テストの変更に係る一連の経過を踏まえ、英語4技能の評価や記述式出題を含めた大学入学者選抜のあり方について検討を行うとして、令和元年12月27日、「大学入試のあり方に関する検討会議」の開催が決定された。会議の検討事項は、(1) 英語4技能評価のあり方、(2) 記述式出題のあり方、(3) 経済的な状況や居住地域、障害の有無等にかかわらず、安心して試験を受けられる配慮、(4) その他大学入試の望ましいあり方の4点である。会議は令和2年末までの開催とし、2月末の時点ですでに3回が開催された。また、「令和4年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法及び大学入学共通テスト問題作成方針について」は、2020年6月頃に改めて公表する予定としている。

2 各大学の入学者選抜方法の見直しと「主体性等」の評価

文部科学省は、高大接続改革を実現するためには、高等学校教育と大学教育の接続面である大学入学者選抜において、「学力の3要素」を多面的・総合的に評価し、大学教育における質の高い人材育成につなげていくことが重要であり、このため、各大学の入学者選抜において、「思考力等」や「主体性等」を十分に把握、評価することが必要だとしている。

そのために、文部科学省は、大学入学者選抜に係る新たなルール、及び調査書や提出書類等の改善について、令和3年度の大学入学者選抜実施要項に盛り込むこととした。その主な内容を以下に整理した。

入試区分の名称変更	内容面の課題	対応策
一般入試 → 一般選抜	出題科目が1～2科目に限定されている場合がある。	筆記試験に加え、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」をより積極的に評価するため、調査書や志願者本人が記載する資料等（※）の積極的な活用を促す。各大学の入学者受入れの方針に基づき、調査書や志願者本人の記載する資料等をどのように活用するのかについて、各大学の募集要項等に明記することとする。 ※ その他、エッセイ、面接、ディベート、集団討論、プレゼンテーション、各種大会や顕彰等の記録、総合的な学習の時間などにおける生徒の探究的な学習の成果等に関する資料やその面談など。 以上のことは、総合型選抜・学校推薦型選抜においても推奨する。

ところが、令和2年2月21日、文部科学大臣は、「大学入試における多面的な評価の在り方に関する協働者会議」を設置し、eポートフォリオの導入の見直しも含め、大学入試における多面的な評価の内容や手法、調査書の在り方やその活用及び電子化の手法、調査書や志願者本人記載資料の活用、大学への情報提供の在り方等について、年内を目途に検討するとした。

3 まとめ

大学入学者選抜において学力の3要素を総合的に評価する仕組みは、現在のところ次々と延期や見直しが発表されている。しかしながら、社会構造の変化を背景として、予測困難な時代の中で生徒がたくましく生きていけるよう学力の3要素をバランス良く育成することが、新しい学習指導要領でも育成が求められている。私たちは、引き続き小・中・高校で一貫して育成できるように取り組まなければならない。

また、eポートフォリオについても、生徒自身が能動的に学習・活動を記録するツールであり、学習や活動の振り返りをする中で、主体的な学びを促すという意義を持っている。大学入学者選抜のみに関わる狭い範疇のものとしてではなく、生徒自身が自己の学びを振り返り将来を考えていくという、キャリア教育につながるものとして、有効に活用されるべきである。

V おわりに

新学習指導要領は、令和2年度に小学校、翌年に中学校で全面実施、そして高校では令和4年度から年次進行で実施され、来年度の大学入学者選抜では第1回の共通テストが実施される。各学校において、目の前の生徒が抱える課題を把握し、カリキュラムマネジメントの視点から学習指導計画を立案し、そして学びの質や深まりを重視した授業改善、適切な評価を実施していくことが肝要である。

今年度は、「大学入学共通テスト」の英語民間試験導入の見送りが決まった後、国語・数学の記述式問題についても導入の先送りが決まるなど、高校教育界にとって大きな変革が続いた年であった。このような変革を迎えるなかで、生徒自らが課題を発見し、他者と協力して解決していくための資質や能力を育む必要があるということ是不変である。まさに教育のあり方が問われているのと同時に、教員だけでなく生徒自身にも、進学の目的や意義を十分に理解した上で高校時代の学びを考える姿勢が、これまで以上に求められている。言い換えれば、将来、社会的・職業的に自立し、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための力をどのように育成していくか、小学校から中学校、そして高校へと、一貫したキャリア教育の充実が大切だということである。大きな教育改革の流れの中で、小学校、中学校、高等学校の連携が一層望まれる。

《参考文献》

- 文部科学省(2020) 大学入学者選抜関連基礎資料集「大学入試のあり方に関する検討会議（第3回）配付資料」（令和2年2月13日）
- 文部科学省(2019)「高大接続改革の進捗状況について」（平成31年1月18日）
- 文部科学省(2019)文部科学大臣記者会見（冒頭発言部分）（令和元年11月1日）
- 文部科学省(2019)萩生田文部科学大臣の閣議後記者会見における冒頭発言（令和元年12月17日）
- 文部科学省(2018)「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告の改正について（通知）」（平成30年10月22日）
- 文部科学省(2018)中央教育審議会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（平成30年11月26日）
- 文部科学省(2017)「各大学の入学者選抜改革における課題の調査分析及び分析結果を踏まえた改革の促進方策に関する調査研究と『主体性等』をより適切に評価する面接や書類審査等 教科・科目によらない評価手法の調査研究」における、「平成28年度委託業務成果報告書」（平成29年5月30日）

- 大学入試センター(2020)「令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト出題教科・科目の出題方法等」(令和2年1月29日一部変更)
- 大学入試センター(2020)「令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」(令和2年2月29日一部変更)
- 大学入試センター(2019)「大学入学共通テストの導入に向けた試行調査(プレテスト)(平成30年度(2018年度)実施)の結果報告」(平成31年4月4日)
- 大学入試センター(2019)「大学入学者選抜に係る大学入学共通テストの出題教科・科目の出題方法等及び大学入学共通テスト問題作成方針について」(令和元年11月15日)
- 大学入試センター(2018)「大学入学共通テストの導入に向けた試行調査(プレテスト)(平成29年11月実施分)の結果報告」(平成30年3月26日)
- 大学入試センター(2018)「平成30年度試行調査(プレテスト)の問題作成における主な工夫・改善等について」(平成30年11月10日)より、「作問のねらいとする主な『思考力・判断力・表現力』、及びそれらと出題形式との関係についてのイメージ(素案)」
- 教育総合研究所(2019)「大学入試通信」第1号(令和元年7月5日発行)、第2号(令和元年12月26日発行)